

羽衣国際大学 令和七年度入学式 式辞

本日、ここに羽衣国際大学令和七年度入学式を挙行できますことは、本学にとつて大きな喜びです。

ただいま現代社会学部 一九一名、人間生活学部 一二七名、合計三一八名の入学を許可いたしました。新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。またこのたび入学される新入生を育て、支えてこられたご家族、関係者の皆様も、たいへんお喜びのことと存じます。本日は、羽衣国際大学の教職員を代表して、心からお祝い申し上げます。

また本日は、多くのご来賓の皆様にご臨席いただいております。常日頃より、学生たちと大学を温かく見守つてくださり、年度初めのご多忙の時期にも関わらず、本日の入学式にお越しいただきましたこと、大学を代表し、心より厚く御礼申し上げます。

さて本学は、今から百二年前の一九二三(大正十二)年に、アメリカに学ばれた島村育人先生を初め、地域の有志の方々によつて設立された羽衣高等女学校を起源としています。女子に高等教育は不要であるという当時の常識に異を唱え、女性もまた豊かな教養と高度な専門知識を持つた社会人とならなければならないという信念のもとに設立されました。島村育人先生は、羽衣高等女学校第一期生に大きな期待と誇りを持って、「あなたが本校に在学なすることは本校の名誉であります」という言葉をかけられました。私もまずこの言葉を新入生の皆さんに贈りたいと思います。

戦後、羽衣高等女学校は、羽衣学園中学校・高等学校となり、一九六四(昭和三九)年には羽衣学園短期大学が設立されました。その後二〇〇二(平成一四)年に短期大学を一部改組転換して、男女共学の四年制大学として設置されました。今年、大学は開学二十三年目を、そして羽衣学園は創立百二年目を迎えます。

学園の建学の精神は、『愛真教育』を基盤とした『自由・自主・自律・個性尊重の人間教育』です。これを言い換えるならば、「時代の常識を疑い偏見や臆断から自由であること、つねに自主的に物事に取り組み考えること、謙虚さを持つて自らを律すること、そして自ら同様に他者の個性を尊重する」人間性育成の精神です。このような人間性を備えた「これからの共生社会において主体的に行動する実践的職業人の育成」こそ、本学の目的・使命であると考えています。

世界を見渡すと、三年前に始まったロシアによるウクライナ侵攻によつて、ウクライナとロシアの多くの若者が命を落とし、さらにすでに七十年以上解決の糸口が見えないパレスチナにおいても、一昨年十月七日にパレスチナ自治区のががで大規模な戦闘が始まり、パレスチナとイスラエルの双方に多数の犠牲者が出、ガザ地区だけに限定しても五万人以上が命を落としました。停戦合意は事実上崩壊し、はばすべてのインフラが破壊されたガザ地区においては、停戦崩壊後の半月ほどの間に新たに千人以上が亡くなり、困難な状況が続いています。

また世界各地で選挙が実施され、各種メディアでは「史上最大の選挙イヤー」ともいわれた昨年、欧米の多くの国々では排外主義を掲げる勢力が支持を拡大し、現在の国際情勢は、残念ながら「共生」とは逆の「分断」に向かっているように感じます。

他者を理解し、多様な個性を尊重することは、ときに容易ではなく、同じ国で生まれ育った人同士であっても、また同じ文化をルーツとする者同士であっても、残念ながら時に激しい対立や暴力に発展することもあります。異文化に育った者同士であれば、なおのこと難しく感じることもあるでしょう。悪意を持って策略を巡らせるなどは論外ですが、たとえ善意に基づいてまわりの人をお願いする場合でも、その表現の仕方が異なることで、思わぬ誤解が生じ、対立に発展してしまうことさえあります。

きょう

本学では、二十三年前の開学当初から多くの留学生が学び、社会に巣立ちました。今日もまた故郷を遠く離れ、ここ羽衣の地で学ぶ意欲を胸にした多くの留学生を、本学の一員として迎えることができました。新入生の皆さんには、国籍を問わず学生同士の交流を深め、文化的背景の異なる友人を見つけてくれることを願っています。そして自

らの文化と異文化において大切にされてきた価値を理解して、開かれた精神で他者の思いを想像できる力を持つた人になつてほしいと思います。

他者とのコミュニケーションを円滑にするためには、論理的に考え、相手にわかりやすく、つまり聞き手や読み手が期待する通りの順序で伝えることが不可欠ですが、比較教育学者の渡邊雅子氏の研究によれば、何をもつて論理的とするのか、つまりどのような順序で説明することが期待されているのか、これも世界どこでも同じではなく、文化によつて異なる型があることが指摘されています。

例えば、アメリカでは最初に自分の主張を明らかにし、次に三つの理由と結論を述べる方式が主流ですが、フランスでは自分の意見や一般的な見方を述べ、次にそれとは逆の、反対の意見や考え方を説明し、両方を十分に吟味して結論を導き出すことが重視されます。一方日本では、起承転結の感想文が中心で、ある経験が自己をどのように変化させたかを共有することで、他者の感じ方への理解を深めることに重きが置かれます。イスラーム圏のイランでは、道徳的に正しいことが決まつており、そこに向かつて論を展開することが論理的とされています。

私が研究で長年携わっている中東イスラーム諸国のなかには、欧州の国々の植民地支配を受け、様々な影響を受けた国々もあります。例えば北アフリカの国モロッコは国民の大半がイスラーム教徒の国ですが、二十世紀前半に約四十年間フランスの保護領となつた歴史があり、今も教育制度などへの影響を残しています。モロッコの人々は、宗教的なテーマについてはイラン型に近く、すでにある正解を実現するための解釈について議論を交わし、それ以外の分野においてはフランス型に近い論理展開を学んでおり、両者のハイブリッド型であるといえるでしょう。

人はともすれば自らの常識、自分がこれまで当たり前と考えてきたことに疑問を呈されたとき、相手こそ非論理的だ、非合理だと受け止め、思考停止に陥り、感情的になつてしまうことがあります。ですから、このように議論の仕方という他者理解のスタート地点において、すでに文化の違いがあることをぜひ皆さんは心に留め、異文化の理解と発見に努めてほしいと願っています。

今日から始まる四年間は、ほとんどの新入生にとつて、自分の疑問を自由に追求できるまとまつた機会としては、社会に出る直前の最後の貴重な時間です。大学での学びは、すでに確立した知識を一方的に受け取るだけの学びではありません。高校までの、ともすれば受け身になりがちであつた学びの姿勢をリセットして、さまざまなことについて「そういうもの」として受け流すのではなく、一歩立ち止まつて「なぜ、そうなのか」と自由に疑問を持ち、自らの手でひとつひとつの疑問を丹念に追求してください。そして、ぜひ表面的な現象にとらわれず、物事の本質を見極め、「より幅広い人々が共生できる社会」の構築に資する新たな価値を創りあげる基礎力を養つてほしいと思います。

また、教員と学生の間で、そして学生同士で学び合う場である大学で、今日からの四年間を活用して、自らの考えを培い、自分自身の未来像を描き、大きく変化する時代に力強く羽ばたく力を養ってください。

今年はこの大阪で五十五年ぶりに万国博覧会、万博も開催されます。在学中には、地域、企業、自治体などと連携した学外での学びや海外への留学など、オフ・キャンパスで学ぶ機会をぜひ活用して、日常生活では触れにくい現実と接し、広い世界を実感してほしいと思います。

さまざまな専門分野で研究や活動を実践する教員や、皆さんの学生生活全般を支援する職員が、ともに皆さんの成長を心から願っています。

新入生の皆さんが本学入学をご自身の新たな出発点とし、これからの共生社会を創造し、主体的に行動する実践的職業人として、個性豊かに成長されることを祈念し、入学式の式辞といたします。

令和七年四月二日

羽衣国際大学学長 中川 恵